

くずまき高原牧場

Kuzumaki Kougen Bokujou

体験メニュー多彩に 地域が誇る全国ブランド

牛の世話や乳しぼり、羊の毛刈り、アイスクリーム作り、石窯ピザ作り。くずまき高原牧場は自然に親しみ、命と触れ合う体験に満ちている。



スノーワンダーランドでかき合わせ、イグルー作りに挑戦する子どもたち＝2016年1月



牛の世話

「ふわふわしてる」。牛を優しくなでながら、えさやりをする子どもたち



くずまき高原牧場産の乳製品

約1800頭の草原や森の中に、牛舎や放牧地、乳製品の工場、ショップ、宿泊施設、イベントが楽しめるドームなどが整備され、町のグリーンツーリズムの拠点となっている。牧場の持つ魅力をまるごと楽しめる多彩な体験メニューを用意。休日の家族連れや観光客が参加するほか、学習旅行や視察も受け入れ、年間延べ30万人が訪れる。

季節の変化も学習の場として生かしている。標高700mで、冬季は積雪がおよそ150cmにもなるが、その雪も資源に換えて、子どもたちが約2週間、雪中体験を繰り返す「スノーワンダーランド」事業も行っている。真冬の厳しい環境下で生き抜く知恵や仲間との絆を育み、一回り大きくなった子どもたちが、最終日は涙で仲間との別れを惜しみ「卒業」していく。町内の農家も協力し、数日間民泊も実施。地元の人たちと交流を深めている。

日本最大規模の公共牧場として、畜ふんを使ったバイオマスシステムや太陽光発電の設備を整え、エネルギーまでまかなう地域完全循環型食糧生産基地も視野に入れる。地球規模の「食糧・環境・エネルギー」問題の解決に挑む同町の取り組みを学ぶ場にもなるほか、IJUターンの促進の雇用の受け皿の役割も果たしている。

情報発信や商品販売などを通して、首都圏でもブランド力を高めてきた。同牧場交流製造部兼営業部の前原信人部長は「一方通行ではなく、今のニーズを見極め、変わるべきところを変えていく時期に来ている」といい、既存のサービスの見直しを進めているところだ。「まずは滞在して良さを感じてもらい、継続的に来てもらえるように、さらに磨きをかけていきたい」と意気込む。